

『ヤスパース 暗黙の倫理学—〈実存倫理〉から〈理性倫理〉へ—』

(中山剛史著 晃洋書房、2019年)

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko

ヤスパース Karl Jaspers (1883-1969) は、ハイデガーと並ぶ20世紀ドイツの代表的な哲学者である。著者の中山剛史・玉川大学教授は日本ヤスパース協会の理事長を務め、我が国におけるヤスパース研究の第一人者である。本書は2016年度の博士学位論文(早稲田大学)が元になっているが、そこから分かるように著者の長年の研究の成果が遺憾なく発揮された力作である。奇しくもヤスパース没後50周年の今年2019年、ヤスパースの誕生日にあたる2月23日に刊行された。

本書において、中山氏は未公開の遺稿をも引用しつつ、主要全著作を通覧して、前期の〈実存倫理〉から後期の〈理性倫理〉への展開を詳細に追跡し、検討している。ヤスパースの遺稿には、2巻合わせて1236頁もある『偉大な哲学者たち』(遺稿1・2)など刊行されたものもあるが、未公開のものも少なくない。中山氏はマールバッハのドイツ文献史料館に赴いて、実際に未公開遺稿の中から倫理学に関するものを幾つか発見し、これを本書の論述の補強をなす重要な文献として使用している。さらにまた、ヤスパースの最晩年の助手を務めたハンス・ザーナーとも何度か面談を重ねて、ヤスパース哲学について意見交換を行っている(上記『偉大な哲学者たち』はザーナーの編集になる)。そのような徹底した研究姿勢は、本書の読者とりわけ若手の研究者にとっては、大きな学問的刺激となるであろう。

ヤスパースの数多くの公刊著作においては、わずかに主著『哲学』第2巻「実存開明」(1932)を除けば、倫理学について正面から論じたものがとくに見当たらないため、たしかに狭義の意味では、彼の思想が哲学的倫理学であるとは言い難い。しかし、彼の哲学的営み全体を貫くエートスはまさに倫理的なものである。例えば、戦争責任の問題を取り上げた『責罪論』(1946)や世界平和について論じた『原子爆弾と人間の未来』(1958)などに、現実問題に関わろうとする彼の強い倫理的・実践的姿勢が窺われる。中山氏はそうした倫理的エートスを「暗黙の倫理学」と見做し、主要全著作をその観点から読み解いていく。その分析視角は鋭く、また的確なものである。

ヤスパースが拠って立つ実存哲学は、人間一人ひとりの無制約性や歴史の一回性を強調してやまないものである。それはどんなに時代状況が変化しようと、人間が人間である限り常に求められるべき精神的な境位について扱う。しかし、実存哲学は一步間違えると、独善的な「狂信的な真理のパトス」に陥りかねない。ヤスパースはこうした危うさをキルケゴールやニーチェに見て取る。

これに対して、ヤスパースは「開かれた真理探究のエートス」を対置する。このエートスこそが、〈実存倫理〉の深さから〈理性倫理〉の広さへと橋渡しする当のものである。そしてそれが、彼の哲学の根底にあって、終始一貫した〈訴えかけの倫理〉として展開しているのである。このように理解すれば、まさにヤスパース哲学とは「暗黙の倫理学」という形で、勝義の意味で哲学的倫理学と言うべき性格を有するも

のとなるのである。

〈実存倫理〉の問題領域においては、すでに〈理性倫理〉へと展開する契機が存在していた。それが、交わり Kommunikation の内で真理をあらわにする〈交わりの倫理〉という視点である。交わりは、彼の哲学の鍵概念の一つであるが、これは開かれた関係を求めるという点で理性と不可分のものである。交わり

と理性という両モチーフは、ヤスパース哲学における健全な精神のありようを示すものであり、彼の著作を読む者はだれもが自分の視界が広まるのを感じるであろう。

〈交わりの倫理〉は、現代倫理学においても注目すべき視座を提供してくれる。中山氏はこの倫理を、普遍的な規範や法則に従うカント的な〈法則倫理〉と対立させて論じているが(166頁以下)、今日の臨床倫理の文脈で考えたとき、〈法則倫理〉がいわゆる正義の倫理としてあるとすれば、〈交わりの倫理〉はケアの倫理として再定位することができるのではないだろうか。ケアの倫理は対人援助の倫理として看護学や社会福祉の場面で論じられることが多い。〈交わりの倫理〉は、ケアの倫理が通常そうするように責任や共感ばかりを強調するのではない。それは、「愛しながらの闘い」という契機を導入することによって、ケアの倫理をより一層新たな展開へともたらすことができるように思われる。

本書は全5章からなり、それぞれに意義のある内容を持つが、特筆すべきは、後期ヤスパースの哲学的倫理学の可能性について論じた第5章「補論—包括者論と哲学的倫理学」である。包括者 das Umgreifende とは、彼の後期思想においては存在そのもの、本来的な存在、存在の根拠の別名であり、一言で言えば〈主観—客観—分裂〉を超え包む一なる存在を言表しようとするものである(241頁)。この包括者論 Periechontologie においては、存在及び人間の多次元性、真理と倫理の多次元性が提示される。もしヤスパースが「書かれることのなかった倫理学」を書いたとしたら、まさにこの包括者論に基いてそれを展開したであろうと、ザーナーは述べたのだ。彼のそうした指摘を踏まえ、中山氏は第5章の総括として、包括的な哲学的倫理学の再構築について論じている。

本書を通じて中山氏が訴えようとしたのは、ヤスパース哲学、ひいては実存哲学を今日的視点から再発見し、新たに取り組み直すべきだということである。最近、全50巻からなる批判校訂版のヤスパース全集の刊行も始まった。本書は、我が国におけるヤスパース研究を牽引していく最重要な研究書の一つとなるであろう。

